

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04479

研究課題名(和文) 常識的見解の功罪をふまえたDV支援活動の啓発 - DVに対する一般常識の把握を通して

研究課題名(英文) Examination of unconscious bias about domestic violence

研究代表者

石井 佳世 (ISHII, Kayo)

熊本県立大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：00551128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではDV支援者や世間がDVに関してどのような常識的見解を持っているのか検討を行った。その結果、大学生は加害者イメージとしてアルコール依存を伴うというイメージや精神的な問題を抱えているというイメージを持っており、加害者にはDV状況をコントロールしにくいというイメージを持っていることが示された。被害者イメージとしては事態をコントロールできる存在として捉えるイメージが示され、被害者の心情の共感や理解から遠ざかる助言がなされる危険性が示唆された。また、支援者は、DVに対する一般的常識とは異なる価値観を持っており、それが被害者支援に必要なだと感じていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではDV支援者や世間がもつDVに関する常識的見解について検討を行った。本研究の知見を活かすことで二次被害の予防につながると考えられる。これまでの研究から、DVサバイバーは世間の常識的な見解からの言動に傷ついてきたことが明らかになっている。常識的な見解からのものであるため、言動をした者も自覚しづらく、悪気がないことが分かるためDVサバイバーも苦痛を訴えられないという悪循環が生じていると考えられる。これは二次被害の側面があったとしても目を向けられていないということである。この現状を変える一助に本研究は貢献しうると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the common-sense views of DV supporters and the public on DV. The results showed that college students had images of perpetrators as having alcohol dependence and mental problems, and that perpetrators had difficulty controlling the DV situation. The image of victims as being able to control the situation was shown. These results suggested the risk of giving advice that would distance oneself from the empathy and understanding of the victim's feelings. On the other hand, supporters had different values from the general common sense on DV, and felt that they were necessary for victim support.

研究分野：臨床心理学

キーワード：DV 常識的見解 心理教育 アンコンシャス・バイアス

1. 研究開始当初の背景

ドメスティック・バイオレンス (domestic violence: 以下 DV) は近年重大な社会問題となっているにも関わらず、従来の DV の研究は実態調査がほとんどであり、有効な支援についての研究は圧倒的に不足している。石井ら (2016) では DV 被害者のコントロール感の検討のため、質問紙調査を行っている。従来、加害者の心理的特徴として被害者へのコントロール欲求の強さがあると述べられてきたが (たとえば伊藤, 2006 など) 被害者のコントロール感について調査、検討している研究は見当たらない。しかし、加害者によるコントロールを受け続けた被害者のコントロール感には何らかの特徴がみられる可能性がある。以上の問題意識を基に検討を行った結果、極端な被支配の立場に置かれていたほうが、完全主義的傾向を含むコントロールのとらわれが増加し、自尊感情にネガティブな影響を及ぼし、PTSD 症状の持続につながるということが明らかとなった。逆に「物事を運命だと受け入れる」等、自分でコントロールしようとするのではなく、個を超えたものにコントロールを委ねる感覚が強いことが自尊感情にプラスの影響を与え、さらに PTSD 症状の軽減につながることを示された。この結果より、アルコール依存者の自助グループにおいても心的外傷からの回復に欠かせない要素とされている「コントロールの委ね」により、個人の満足の追求だけではない、より幅広く自己をコントロールしている感覚を持つことが可能になることが考察された。また、有村・石井 (2014) では交際しているカップル間で生じる DV 的状況である「デート DV」の質問紙調査を行った。大学生及び専門学生 250 名を対象とし、デート DV 加害及び被害の傾向とコントロール感等の関連を検討した。その結果被害傾向・加害傾向が高い群は、完全主義など自己への要求水準が有意に高く、従来加害者は被害者へのコントロール欲求が強い傾向があると指摘されてきたが、そのコントロール欲求は自身にも向くことが推察された。これらの結果は、被害者・加害者双方のコントロール感に焦点を当てた対話による支援の可能性を示唆するものと考えられる。さらに石井ら (2012) では自らの被害を DV と認識した体験についても自由記述にて尋ねており、その体験により「(被害を受けるのは)自分のせいではない、自分が悪いのではない」と認識し、DV 関係からの脱出のきっかけとなりうる一方、恐怖感を持ったりショックを受けたりすることにもつながりうることを示唆された。この結果は、自らの体験を「DV」と認識したことにより、「DV」という言語にとらわれてしまい、加害者と被害者という対立構造が浮き彫りになることで問題が深刻化するおそれもあるということを示していると考えられる。

これらの結果をふまえて石井 (2016) は DV サバイバーの「DV」という言語の使用についてインタビュー調査を通して検討し、「DV」と認識することによって DV サバイバーが自分の体験をどう整理し解決に生かしたのかに関する検討を行った。その結果、DV サバイバーは自分の経験を DV という概念で整理することで現状を受け入れることができるようになる一方、周囲や援助者の DV に関する常識的な見解に基づく助言により傷ついた体験を持つことが明らかとなった。

2. 研究の目的

常識的な見解をふまえた対話は DV 被害者の DV 状況からの脱出に寄与することがある一方、DV 被害者への偏見を生んだり、DV 被害者の心情の共感や理解から遠ざかったりする危険性があることは否定できない。本研究では DV 支援者や世間が DV に関してどのような常識的な見解を持っているのか検討を行う。

3. 研究の方法

(1) 現象学的方法を用いた質的研究

インタビューによって得られた逐語データを、Giorgi, A. (2009 / 2013) と Giorgi, A. の弟子である Wertz, F.J. (1983) の方法を基にした石井 (2016) の方法を用いて分析した。プロセスは、インタビューの音声データを逐語録に起こす。全体の意味・感覚を得るために読み込む。調査協力者と調査者の対話を、発言者が特定できる形で 3 列からなる表の左側の欄に記入する。調査協力者の叙述を、句読点にこだわらず、調査者の発言を跨ぐことも気にせず、意味の転換を経験する箇所を改行し、意味単位を明確にする。調査協力者の自然的態度からの表現を、意味単位ごとに現象学的心理学的に感受性のある表現へと変換する。すなわち今研究している現象に関して生きられている経験の心理学的側面を露わにする言葉へ変換する。変換後の叙述は、3 列の表の中央に記入し、変換が足りない場合はさらに右側の欄に記入する。この時、研究者が自分自身の経験の分析ではなくて、ある他者の経験の分析を行っているということを明瞭にするため、一人称表現を三人称表現に変える。調査協力者ごとの「個別的心理構造」を、変換された意味単位の最後の欄に基づいて想像自由変容を用いて検討し叙述する。

複数の調査協力者の経験を、その個別例あるいは特殊例として包括して理解する「一般的心理構造」を叙述する。以上の 7 ステップからなる。

(2) KJ 法を参考にした質的研究

インタビューの逐語録を作成し、内容を質的にグループ化するために KJ 法を参考にした分析

を行った。プロセスは、カード化、カードの分類、見出しをつける、繰り返す、図解する、以上5つのステップからなる。

4. 研究成果

(1)DV 支援者の常識的支援観にまつわる心理構造

本研究では、DV 支援者の常識的支援観にまつわる心理構造について検討を行った。

DV 被害者に関わった経験を持つ相談員及び地方自治体職員 8 名を対象に、自由記述形式の質問紙調査を行なった。DV 支援にかかわった期間は 3 年～12 年であり、全員女性であった。質問項目は DV 被害者や加害者に伝えたいことや被害者や加害者が理解しておくべきだと考えること、望ましい DV 支援や社会が DV に関して理解すべきであると考えらること等である。自由記述で得られた内容を、Giorgi, A. (2009/2013) と Wertz, F.J. (1983) の方法を基にした石井 (2016) の方法により分析を行った。自由想像変容の手続きにより検討された一般的心理構造は以下の通りである。

支援者は、DV に対する一般的常識とは異なる価値観を持っており、それが被害者支援に必要なと感じている。DV に対する社会的関心の高まりは感じているものの、適切に理解しているとは感じられず、不十分な印象を抱き、残念に思っている。一般に DV が身近にない特殊な問題として捉えられ、特別な関係性で起こる個人的な問題とみなされ、社会構造の問題という側面を持つことが理解されていないことを危惧している。社会に浸透している固定的な性的役割分担意識や、しつけという名目で暴力や暴言が容認され、対等でない権力差のある関係が疑問視されない社会のあり方が、DV の背景理解に不可欠だと支援者は考えており、特に、的確なジェンダー視点を重んじていた。社会が変わるために、子どもの頃からのジェンダー教育の必要性を強調し、ジェンダー間の平等が当たり前の環境で子どもたちが育っていくことを望んでおり、教える大人の学びの必要性も感じている。

被害者をエンパワーメントする具体的な視点を様々に持ち、中には児童虐待を止められない母親が DV の被害者である点を確認として重んじ、児童虐待に対する無実を強調するなど、ともすると一般的常識から乖離しているときみされるおそれのある、支援者に特徴的な常識も示唆された。

被害者に対して、被害者が悪いのではないこと、加害者に責任があること、さらには社会構造の問題であることを伝えたいという思いを強くもっている。被害者の身に起きていることを、DV として自覚することは必要だと考える一方で、その生活を生き延びてきたことをねぎらったり回復できることを強調したりするなど、エンパワーメントしたいとも考えているのだった。

加害者に対しては制度化に言及するなどやや抽象的であり、具体的な支援イメージは指導的であることも示された。加害者もまた、男性優位社会から男性性を要求され、翻弄された結果、DV という表現に陥ってしまっているという理解をしつつも、暴力は決してゆるされるものではなく、加害者が自分で選んだ手段なのだとして自覚することの必要性も確認として強調するのだった。もし加害者が自覚し、自らを見つめ直すのであれば、現在のパートナーとの関係が修復できなくとも、加害者の人生はより望ましいものになるのだという信念ももっており、加害者への期待ももっている。そのためにも社会に加害者支援がより一層充実していくことが望ましいと考えているのだった。

支援者はまた、児童への影響に対して強い懸念をもっており、被害者や加害者に伝えるようにしている。

DV の問題は被害者と加害者の二者に閉じていては解決が難しく、第三者的な専門家の必要性も感じている。支援者として、支援が支配にならないために DV を正確に理解することや、被害者にしっかり耳を傾けることも重視しており、一般的常識への懸念だけでなく、支援者自身の常識へのクリティカルな姿勢も併せ持っていた。DV を生き延びてきた被害者のもっている力を信じているとはいえ、DV 被害は多大な苦痛を伴うものであるため、力が残っている早い段階で、迷わず支援者に相談してほしいという願いももっているのだった。

DV 支援について、支援が指導か、耳を傾げるのか心理教育を実施するのか、個人を重んじるのか社会に抗うのか、被害者の力を信じるのか被害者の声を代弁するのか、本人の希望に寄り添うのかリスクに介入するか、といった多くの二元論的な価値観のはざまに、支援者は支援を続けている。そして多くの場面で二元論的な価値観は、葛藤ではなく両立が目指されているのだった。

(2)DV 加害者イメージ及び被害者イメージの常識的構造 - 大学生を対象に -

本研究は、DV にまつわる世間の常識的見解を把握することを目的として行われた。大学生を対象に、DV 加害者及び被害者イメージについて自由記述形式の質問紙調査を行い、KJ 法を参考にして分析を行った。その結果、DV 加害者のイメージとして【加害者自身にコントロールできる範囲を超えている】【理解できない側面】【理解を超えた極端さ】【加害者の事情をわきまえた理解】【自分が悪いとは思わない】【加害者の属性】の 6 つの大グループが見出された (Table 1)。DV 被害者のイメージとしては【被害者のコントロール内】【被害者のコントロール外】【DV 被害の一般的イメージ】の 3 つの大グループが見出された (Table 2)。

結果より、加害者イメージとして加害行動は悪いものであると認識しつつも、アルコール依存を伴うというイメージや暴力の世代間連鎖が背景にあるという視点、加害者が理解しにくい存

在であるというイメージから、加害者に加害行動をコントロールするのは難しく、加害者に変化を求めても難しい、という常識を持っていることが示唆された。一方、被害者イメージとしては事態をコントロールできる存在として捉えるイメージが多く示された。また、【DV被害の一般的なイメージ】としては《親しみやすい性格》も挙げられ、自分と近い、理解可能なイメージを持っていることから、助言しやすい存在であるとの常識がある可能性も考えられる。被害者がDV状況をコントロールできる力を持っていると考え、助言しやすい存在であると感じるが故に、被害者に対してDV状況をどうにかすべきであり、そのために行動をするべき、と伝えることにつながる可能性がある。このような助言はDV状況からの脱出に寄与することもあるだろう。しかし、DV被害者は暴力を振るわれ続けることにより恐怖心をもち、「自分は相手から離れることはできない」という学習性無力感につながることも従来指摘されており(Walker, 1979/1997)、行動を起こすことが容易でない場合もありうる。その場合DV被害者の心情の共感や理解から遠ざかったりする危険性があることは否定できない。さらに、それらの助言は常識的な見解からのものであるため、助言をした者も自覚しづらく、悪気がないことが分かるためDV被害経験者も苦痛を訴えられないという悪循環が生じる可能性も考えられる。これは二次被害につながる危険性を持つ。本研究より、DV支援やDVの予防教育にあたっては以上の点を留意する必要があると考えられる。

Table 1 加害者イメージの分類

大グループ	カード数	中グループ	カード数	小グループ	カード数
加害者自身にコントロールできる範囲を超えている	54	機能不全	27	世代間伝達	14
				アルコールなどの嗜癖の影響	13
		衝動性	16	感情の起伏が激しい	11
				衝動的な暴力	3
				「つい」という理解の仕方	2
				やめられずに繰り返す	7
理解できない側面	48	止められない	11	コントロールできない	2
				エスカレートしていく	2
		無自覚な暴力	1	無自覚な暴力	1
		ハネムーン期の存在	26	ハネムーン期の存在	26
		性格の二面性	16	外ではいい人	7
				普段はいい人	3
理解を超えた極端さ	41	被害者への依存	6	被害者への依存	6
		コントロールへのとらわれ	32	思い通りにならないと暴力	12
				暴力による支配	3
				支配欲	5
				独占欲	8
				自己中心的	4
加害者の事情をわきまえた理解	30	DV加害者への拒絶反応	9	他者を軽んじる	3
				性格へのネガティブイメージ	4
				加害者を軽蔑	2
				ストレスを抱えている	8
		社会的な生きづらさ	19	ストレス対処能力の低さ	4
				コミュニケーション能力の低さ	5
自分が悪いと思わない	8	DV被害者を愛している	5	DV被害者を愛している	5
		DV被害者の苦しみに理解	4	DV加害者には罪悪感がある	2
				DV加害の苦悩	2
		自信のなさ	2	自信のなさ	2
		相手のせいにする	5	相手のせいにする	5
		DV加害者としての自覚がない	3	DV加害者としての自覚がない	3
加害者の属性	15	加害者は男性に多い	11	加害者は男性に多い	11
		男性も女性も加害者になりうる	2	男性も女性も加害者になりうる	2
		加害者の職業イメージ	2	加害者の職業イメージ	2

Table 2 被害者イメージの分類

大グループ	カード数	中グループ	カード数	小グループ	カード数		
被害者のコントロール内	90	DV被害者としての自認の薄さ	21	自分が悪いという思い込み	16		
				DV被害の自覚の薄さ	3		
				被害が当たり前になる	2		
		問題への対処をしようとならない	16	加害者への期待	15	DV被害者は離れようとならない	9
						相談しようとならない	3
						抵抗せずにあきらめている	4
		加害者への期待	15	役割への自負	14	DV以外の側面への手放せなさ	8
						ハネムーン期による悪循環	7
						必要とされる必要	12
						加害者の変化に貢献する役割の自認	2
						DV被害者は加害者を守るとうとする	8
加害者に好意的	12	相補関係を維持しやすい性格	9	DV加害者を愛している	4		
				相補関係を維持しやすい性格	9		
被害者への批判	3	被害者への批判	3	被害者への批判	3		
				逃げたくても逃げられない	8		
被害者のコントロール外	44	問題への対処ができない	33	相談できない	13		
				逆らえない	8		
				耐えている	4		
				怯えている	7		
感情的に支配されている	11	DV被害イメージ	20	恐怖のために行動を起こせない	4		
				心身に大きな傷を負う	16		
DV被害の一般的イメージ	34	被害者の属性イメージ	14	被害を隠す	4		
				被害者は女性に多い	11		
				親しみやすい性格	3		

【引用文献】

- 有村瑞季・石井佳世(2014). デートDVにおける被害傾向・加害傾向と二者関係性及びコントロール感の検討. 日本ブリーフセラピー協会学術会議第6回大会発表論文集.
- Giorgi, A. (2009). The descriptive phenomenological method in psychology: A modified husserlian approach. Duquesne University Press. 吉田章宏(訳)(2013). 心理学における現象学的アプローチ. 理論・歴史・方法・実践. 新曜社.
- 石井佳世(2016)自身の被害をDV概念でとらえることはどのような経験なのか. 日本カウンセリング学会第49回大会発表論文集.
- 石井佳世・石井宏祐・丸田なつき(2016)DVサバイバーのコントロール感とはDVからの回復にいかにかに寄与するか - 過去の相補的なDV関係に着目して - . 志学館大学心理臨床研究紀要. 5, 3-10.
- 石井宏祐(2016)心理臨床における嗜癪的解決努力と脱嗜癪的アプローチに関する研究 嗜癪当事者, 嗜癪者家族, 援助専門家のコントロール感に着目して. 東北大学博士論文.
- 伊藤直文(2006)第2章緊張と歪みからの回復 暴力のメカニズムと克服の道 村瀬嘉代子監修 家族の変容とこころ. 新曜社.
- Walker, L.E. (1979) The Battered Woman. New York Harper & Row. 斎藤学(監訳)(1997)バタードウーマン 虐待される妻たち. 金剛出版
- Wertz, F.J. (1983). From "everyday" to psychological description: An analysis of the moments of a qualitative data analysis. Journal of Phenomenological Psychology, 14 (2).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石井佳世・石井宏祐	4. 巻 9
2. 論文標題 DV加害者イメージ及び被害者イメージの常識的構造 - 大学生を対象に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 149-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井宏祐・石井佳世	4. 巻 9
2. 論文標題 DVサバイバーのコントロール感に対するトラウマの大きさの影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井佳世・石井宏祐	4. 巻 7
2. 論文標題 DV被害者にとって自身の被害をDV概念でとらえることはどのような経験なのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 153 - 161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井宏祐・石井佳世	4. 巻 7
2. 論文標題 回復を続けるDV被害経験者のDV観に関する質的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 143 - 152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐
2. 発表標題 育児困難場面における母親のしつけの構造
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士の嗜癖的な経験
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 アディクション臨床におけるブリーフセラピーを愛着理論から考える
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐・岡田明日香
2. 発表標題 DV支援者の常識的支援観にまつわる心理構造
3. 学会等名 第42回日本アルコール関連問題学会（誌上大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐
2. 発表標題 変化志向に悪循環のおそれがあるときの家族療法
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐
2. 発表標題 DV加害者イメージ及び被害者イメージの常識的構造
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐・石井佳世・丸田なつき
2. 発表標題 DVサバイバーのコントロールにまつわる経験
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世
2. 発表標題 子育て神話とブリーフセラピー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 ベイトソンのアディクション観・自助グループ観はブリーフセラピーにどう役立つか
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐・石井佳世
2. 発表標題 アディクション支援からみた家族療法
3. 学会等名 日本家族心理学会第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井宏祐・松本宏明
2. 発表標題 ブリーフセラピー入門 初学者の方が陥りやすい行き詰まりのポイントと対処のコツ
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第9回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	石井 宏祐 (ISHII Kosuke) (30441950)	佐賀大学・教育学部・准教授 (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------